

相談援助実習指導に関する探索的研究

－IT機器を活用した試み－

なかのようこ まつもとようこ
中野陽子 松本葉子

〈要 旨〉

相談援助実習において週1回以上の巡回指導を行うことになったことをうけ、実習中の指導のあり方に関する新たな方法を模索するために、IT機器活用を試みた探索的な研究を行った。実習指導者、学生、実習担当教員のそれぞれ2人ずつでIT機器を活用した巡回指導を行った結果、視線が合わない、声のタイムラグが生じる等といったこともあったが、表情が読み取れ、実習日誌を添削することもできるため、実習巡回への代用も可能だという結果になった。また、学生のことを熟知していないもしくは専門分野ではない教員が巡回指導を行うよりも、学生のことを熟知した実習担当教員によるIT機器を使用しての実習指導のほうが、指導の効果が得られると考えられた。ただし、IT機器の利用にあたり、機器の設置環境、セキュリティ、費用面などの課題も浮かび上がってきた。

〈キーワード〉

相談援助実習 IT機器活用 巡回指導

I. はじめに

2007(平成19)年12月に社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律(法律第125号)が成立し、社会福祉士養成の教育カリキュラムが大幅に見直された。相談援助実習においては、実習担当教員及び実習指導者の要件等が定められ、専門学校等の養成校及び4年制大学は、週1回以上の巡回指導を行うこととなった。ただし実習先との連携が十分になされている¹⁾。つまり、週に1回程度は、実習担当教員と学生が会い、きめこまやかな実習指導を行うことが求められ、また実習施設との密な連携をとる必要性も求められているといえよう。

田園調布学園大学(以下本学)では、カリキュラム改正以前から、厚生労働省が示した実習巡回1回以上という基準を上回り巡回を2回実施し、改正後はさらに帰校日を2日設定し、180時間

の実習期間中に教員による指導が合計 4 回実施されるシステムにした。

本学は、人間福祉学部(社会福祉学科社会福祉専攻・介護福祉専攻、心理福祉学科)に所属する約 170 名の学生は、社会福祉士受験資格取得が卒業要件となっているため全員が相談援助実習を行っている。2012 年度においては、170 名の学生に対して実習担当教員 15 名(内非常勤 2 名)で実習指導を行った。しかし、実習指導教員だけでは、全員の実習巡回指導を実施することが物理的に困難な状況にあるため、巡回のための協力教員 9 名(専任)にも協力を仰ぎ実習巡回指導を行っている。しかし、実習先の指導者からは、「毎年、実習生のことをよく知っている担当の教員に巡回してもらいたい」とのご意見をいただくこともあったため、2012 年 5～6 月に巡回・帰校日体制についてのアンケート調査を実施した²⁾。

アンケート調査は、2012 年度に本学が相談援助実習を依頼し、実習生を受け入れてくださった 134 施設に対して実施したところ 108 施設より回答があり、有効回答率は 80.6%であった。その結果、実習指導者が巡回教員として望ましいと考えているのは、実習生を熟知している教員(約 96%)、実習機関・施設種別の専門の教員(約 78%)、毎年同じ教員が巡回をする(約 38%)であった。つまり、多くの実習先において実習生を熟知している教員に巡回してほしいと思っていることが明らかになった。また、巡回および帰校日指導のどちらが多いほうが良いかについては、どちらでも良いが半数以上であり、一律に巡回回数を決めるのではなく実習生や状況に応じて柔軟に対応してはどうかとの意見も挙げられた。さらに、行政機関や児童関係施設においては、教員と施設側との巡回日程の調整が困難な状況にあることも明らかになった。

しかし、厚生労働省が打ち出している、週 1 回程度の学生への実習指導を遵守し、さらに施設側が求めているように学生のことを熟知した教員が巡回指導を行うという状況を作り出すことは容易ではない。このような状況は、本学だけではなく多くの養成校でも同じような課題を抱えていることが推察される。

そこで、実習中の指導のあり方に関する新たな方法を模索するために、TV電話などのIT機器活用を試みたいと考えた。

Ⅱ. 巡回，帰校日，TV電話に関する先行研究

国立情報学研究所学術情報ナビゲータCinii³⁾で、「社会福祉」・「実習」・「巡回」で検索したところ(2012.3.25 現在)8 本が検出された。なお、社会福祉のキーワードをソーシャルワークと相談援助にも置き換えて検索したが、検出された論文に変化はなかった。また、「社会福祉」・「実習」・「帰校日」で検索をしたところ 1 本も検出されず、社会福祉を相談援助に置き換えたところ 1 本のみ検出された。本数だけみても、相談援助実習における巡回や帰校日に関する調査研究は、まだ少ないことが明らかである。このことは、2007 年改正以降に生じてきている課題であるため当然のことと考えられる。なお、論文数が少ないため、「社会福祉実習」・「指導」も検索したが 33 本であった。

少ないながらもいくつかの先行研究を概観したい。福富⁴⁾らは、新カリキュラム下において実習巡回指導を行う担当教員の役割について事例研究を実施し、例年であれば1回の指導が4回になったことに伴いどのような指導を実施できたかを明らかにしている。結果として、実習生の精神的サポート、実習生体験の意味づけ、理論的、実践的整理の手助け、アセスメント・プランニングの課題への取り組みの指導、実習施設と教員・大学の教育における意思疎通が図れること等を挙げている。しかし、その半面でアセスメント・プランニング等の課題に対し指導できる教員としての力量が求められること、夏期休暇期間中の巡回指導の回数増により、研究活動の時間が圧迫されることなどが課題として挙げられていた。

小川⁵⁾らは、実習巡回指導における教員の役割の実態把握をするためにフォーカスグループインタビュー調査を実施している。その中で、実習巡回指導における教員の役割として、学生からは、実習指導者と学生の調整、学生の意見の把握と精神的サポート、信頼関係のある教員の訪問が望まれていた。実習指導者からは、実習計画書の確認と指導、精神的サポート、実習の取り組みの修正、実習施設の理解の促進が求められていた。教員自身としては、実習目標の意識化、精神的サポート、実習指導者との情報交換と実習受け入れ態勢の充実、学生の状況把握と報告といった点が意識されており、教員が実習巡回において学生と実習指導者とをつなぎスーパービジョン機能を発揮していると述べている。

山田ら⁶⁾は、学生、実習担当教員、実習指導者の3者において展開されたスーパービジョンをプロセスレコードにまとめ、実習指導者と教員とのエピソードを抽出し質的分析を行っている。その結果、教員は実習指導者の負担感や困難さを共有した上で、学生のスーパービジョンの焦点化を行うことが教員としての役割の一つであり、実習指導者と実習生を媒介する機能が期待されていることを明らかにしている。そして、その機能を果たすためには、実習指導者との対等な関係に基づく対話が求められているとしている。

井上⁷⁾は、巡回は、実習教育の中でも重要な位置づけであり、これを単に「手土産をもって、挨拶に行くだけ」とするか「実習生のみならず、実習先を巻き込んだスーパービジョンと見なすか」は、大きな違いがあるとし、専門職養成としての実習のあり方について言及している。

以上のように、相談援助実習での巡回指導における教員の役割は、精神的サポートから実習施設との連携、スーパービジョンなど多くの事柄が期待されており、それゆえ実習担当教員の力量も求められているといえる。また、多くの役割を果たさなければならない半面で、指導回数の増加に伴う教員の負担も懸念されている。

次に、テレビ電話の先行研究も概観しておく。「テレビ電話」・「福祉」に関する先行研究は34件あり、うち最近10年(2002～)の研究は25本であった。内訳は、テレビ電話を活用した高齢者支援(生活・メンタル)が6本、テレビ電話を活用したろう者支援(手話、歩行支援)が3本、テレビ電話の映像通信について(手話動画、品質評価、手話対話における遅延)が13本、テレビ電話を活用した遠隔地授業が2本、その他が1本であった。「テレビ電話」・「実習」で検索したところ

栗谷らの論文が1件検出された。栗谷ら⁸⁾は、テレビ電話などIT機器を活用した実習指導に関する研究として、地域看護実習において、テレビ電話による遠隔カンファレンスを試み、分散・拡大した地域看護実習に対する運用と評価を検討していた。カンファレンスとしての機能と有効性は実用に耐えうるもので、新しい教育方法の可能性が示唆されている。

このように実習指導においてIT機器を活用する研究はほとんど行われておらず、相談援助実習指導でIT機器を活用した指導を実施したとの先行研究は見られなかった(2012.9.20 現在)。

Ⅲ. 研究の目的

新カリキュラムへの移行に伴い、実習巡回指導の回数が増加し、さらに教員に多くの役割が期待されている。学生からも信頼のおける教員からの指導を望む声があり、実習指導者からも学生を熟知した教員による実習巡回指導を求められている。しかし、本学では多数の実習生を同時期に送り出している現状があるため、現実的にはそれが叶わぬ状況にある。このことは、他の養成校においても同様の課題を抱えていると考えられる。そこで、実習担当教員による顔の見える指導が行えるテレビ電話などのIT機器を活用することで、担当教員が実習前・中・後の一貫した指導が行えないかと考えた。このような機器を活用することで、学生にとっても実習先の施設側にとっても有益かつ効率的な実習指導のシステムを作れるのではないだろうか。

厚生労働省は、巡回指導についてメールや電話での指導は適切ではないとしているが⁹⁾、顔の見えるTV電話などは想定していないと思われる。そこで、本研究では、実習中における教員の多様な指導のあり方を模索するため、株式会社リコーグループ技術開発本部の協力を得てコミュニケーション機器による実習指導を試み、将来的にIT機器が実習指導に生かせるかどうか探索的な試みを行うことを目的とする。

Ⅳ. 研究方法・対象

1. 研究方法

コミュニケーション機器RICOH Unified Communication System P3000¹⁰⁾を活用し、実習担当教員は大学にいながらにして実習生に対して遠隔地指導を行った。そして機器による指導の直後に実習指導者および実習生へ半構造的なインタビュー調査を実施した。

実施スケジュールは、表1を参照されたい。まず、本番前の事前準備として実習先施設の環境確認が必要であった。本番前(H24.7.31)に研究者とリコー協力者とで研究協力をいただいた2施設へ赴き、実験を行う部屋とモニターの有無、電波状況の確認等を行った。その結果、施設側は2施設ともに有線LANを使い、大学側はモバイルWi-Fiルーターを使って接続することにした。

実習生は、実習開始早々(実験本番1週間ほど前)に、実習担当教員ではない教員による巡

回指導および帰校日指導を受けた。そして実習中 3 回目の指導を今回の試みであるコミュニケーション機器活用による担当教員指導とした。これは実習担当教員以外の教員が巡回および帰校日指導を行っている場合を想定したものである。機器を活用することで担当教員が実際に巡回へ行かなくても的確な指導が可能かどうか、実習生および実習指導者がどのように感じるか知りたかったためである。本番は、地域包括支援センターはH24.8.17、障害者支援施設はH24.8.24に行った。遠隔地指導ではあるが、通常の巡回通り、コミュニケーション機器を通して、実習生と教員の1対1、指導者と教員の1対1、状況により実習生と指導者対教員の2対1のやりとりを行った。そして、機器活用直後に、実習指導者と実習生双方にそれぞれインタビュー調査を行った。筆者が大学からコミュニケーション機器を用いて担当学生の遠隔地指導を行った際には、共同研究者である松本が実習先でフォローおよびインタビュー調査を行い、松本が大学からコミュニケーション機器を用いて担当学生の遠隔地指導を行った際には、筆者が実習先でフォローおよびインタビュー調査を行った。これは実験直後の感想をリアルタイムに収集するため現地に詰めていたのと、実習生が実習担当教員ではない教員からインタビューされることで評価を気にせず自由な意見を言えるようにするため配慮した。なお、厚生労働省の指導に則った、現在の本学の2回巡回、2回帰校日の指導体制に加えて、IT機器を活用した実習指導を実施した。

表 1.実施スケジュール

H24.7.31	事前準備(施設的环境確認)
H24.8.6	実習開始
H24.8.10	実習担当教員以外の教員による巡回指導①
H24.8.11	大学にて帰校日指導②
H24.8.17/24	コミュニケーション機器利用による指導③
H24.8.25	大学にて帰校日指導④
H24.8.31	実習担当教員による巡回指導⑤
H24.9.7	実習終了

2. 研究対象者

コミュニケーション機器活用に協力が可能な施設機関および学生を研究者が抽出した。対象者は実習生2名(共同研究者である松本と筆者のクラスより各1名)とそれぞれの実習先である地域包括支援センター(高齢者の相談援助)と障害者支援施設(知的障害者施設)の指導者である。地域包括支援センターでの実習生は、社会福祉学科社会福祉専攻3年女子、障害者支援施設の実習生は、社会福祉学科介護福祉専攻3年女子である。また、地域包括支援センターの指導者は男性、障害者支援施設の指導者は女性で、両指導者とも、数年来本学の実習生指導を担っている。

3. 機器について

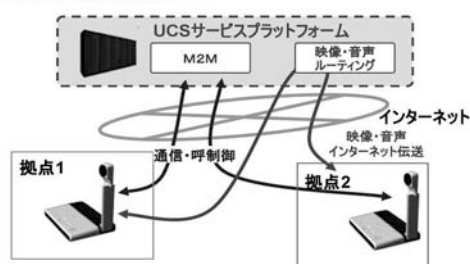
今回の実験には、カメラ、マイク、スピーカー、有線・無線LAN を内蔵しながら、A4 サイズで薄型(40mm)、1.6kgとコンパクトで軽量なため、持ち運びが簡単で施設の限られたスペースでも設置が容易である、RICOH Unified Communication System P3000(以下、コミュニケーション機器)を使用した。コミュニケーション機器の概観については、写真1を参照されたい。

このコミュニケーション機器は、図1に示すように、複数の拠点をインターネット(有線LANに加え、無線LANにも対応)を利用して接続し、映像や音声を伝送する。電源を入れたと約30秒で起動、接続はアドレス帳から相手を選ぶだけでテレビ電話が可能である。専用機であるためパソコンよりも操作が簡単である。セキュリティに関しても暗号化されており、事前にアドレス帳に設定した相手しか接続できないシステムとなっている。

画像は、130万画素の高解像度のため大変クリアである。実際の使用状況は、写真2のとおりで、1対1の場面でも2対1の場面でも鮮明な画像で会話を行うことが可能である。また、写真3のとおり画面を通して実習日誌を読むことも可能であり日誌の添削指導を行うことができる。写真では、文字の読み取りは難しいように見受けられるが、実際には無理なく文字を読むことができる。また、顔を映し出すことと書類を映し出すことの切り替えもスムーズに行うことができ、映像が途切れにくく高画質な映像や音声の圧縮方式を採用しているためお互いの表情が伝わりやすい。

他にもパソコンにカメラを取り付ける方法やスカイプの利用も考えられたが、いずれも実習日誌を映し出すことは困難であるため利用を見送った。上記のように、簡便性、高画質、セキュリティ、カメラの切り替え、実習日誌の閲覧可能などの利点を考え、本研究では、コミュニケーション機器を利用することとした。

今回の接続拠点



RICOH

図1. コミュニケーション機器接続拠点について



写真1. コミュニケーション機器外観



写真2. コミュニケーション機器活用状況

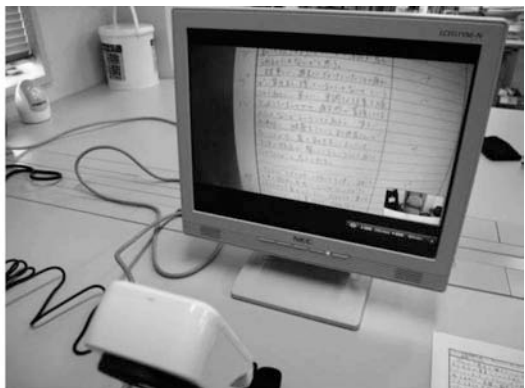


写真3. 実習日誌閲覧状況

4. インタビュー内容

実習指導者と実習生それぞれに個室で半構造化インタビューを行った。了承を得てICレコーダーにて録音を行った。インタビューガイドは以下の通りである。

- ①コミュニケーション機器の設置や簡便さ、大きさなどについての感想(指導者のみ)。
- ②今回、担当教員ではない教員が1回目巡回した。本学では実習担当教員以外の教員に巡回を手伝ってもらっている実情があるが、実習担当ではない教員が巡回にまわることをどのように思うか。
- ③巡回ではないが、本日コミュニケーション機器を使って、実習生本来の実習担当教員と話ができただ感想はどうであったか。
- ④コミュニケーション機器を使うことのメリットとデメリットについてどう思うか。
- ⑤今後、巡回に代用できると思うか、また巡回ではなくとも実習指導に使えると思うか。

5. 倫理的配慮

個人情報保護および倫理的配慮を行うことを実習生および実習指導者に書面にて説明し同意を得た。また、本研究は田園調布学園大学研究倫理委員会を通っている。

V. 結果

実験本番の遠隔地指導は2施設とも1時間～1時間半で終わった。実習指導者および実習生へのインタビューの回答は表2、表3の通りである。

表2. 実習指導者へのインタビュー結果

	地域包括支援センター(高齢者相談)	障害者支援施設(知的障害者施設)
①	年代にもよるが、機能については口頭説明してもらえば操作は可能。説明書を読んで一から設置するのは難しいかもしれない。大きさは話すのに気にならなかった。目線を合わせるのが一番難しかった。どこを見て合わせればよいのかかわりにくかった。相手の表情の変化を逐一見ながらの面接には不向きだが、巡回指導や会議には十分に使えると思った。多少相手とずれるのであいづちのタイミングが難しく、気を使った。今回は初対面の人との会話ではなく、教員と実習指導者それぞれがタイミングや癖をある程度知っていたので、お互いが気を使いうまくコミュニケーションが図れたと思う。知っているもの同士、会ったことがある人同士の会話で補助的な使い方をするのであれば可能だと思う。LANについては、セキュリティをしっかりとて機器への信頼性について確認し合えばよい。こういった機器では個人情報を守る精度を上げていてもらいたい。	設置に関しては、教えてもらい、覚えれば簡単にできると思う。 電話だと表情が見られないが、コミュニケーション機器は表情が見えるやり取りができるので臨場感があつた。何かあつた時の活用ができると思う。
②	厚生労働省の求める巡回や帰校日の役割や目的など指導の趣旨を理解できていれば、どの先生が来てもかまわない。また実習先にどのような関係を求めるのか、対等な関係であればよい。実情を考えれば福祉のプロで学生のこともよく知っているに越したことはない。双方にうまく伝えられたし、実習生に合った指導ができるし、間違つた指導をしていたときに指摘してもらえらるだろう。学生に不利益にならないよう、質の担保のためにこういった機器を使い、ギャップを埋めることも必要だと思う。170人という大人数の学生が実習に出て、限られた時間の中で実習巡回を行っていることを考えると活用する意味もあると思う。	指導者が話す内容を理解できる教員であればよい。実習担当教員が巡回に来られなくても、メールや電話があるので、何かあつた時にはそういった手段で連絡をとるので問題はない。大学での学生像と実習先での学生像の違いなどもあると思うので、実習担当教員とはその違いなどを共有し、実習指導に生かしていきたい。

③	直接会って話すより、印象は薄い。言葉としては伝わってくるが後に残るものが軽いように感じた。直接対面で会って話すと、たとえメモをとらなくても「こういう会話をしたな」と重く残る。感覚的なことかもしれない。	若干視線に違和感があったが、表情を見ながら話したので、相手の気持ちがわかった。会っている感じがして違和感は特になかった。
④	メリット：時間の有効活用。先生の移動時間等を考えると負担軽減になると思う。 デメリット：後に残るものが軽い、浅い、薄い感覚がある。会って話した方がよい。目線、声のタイムラグ、時々声が途切れたのは気になった。	メリット：相手との顔の見えるやりとり。電話だと声のトーンのみなので便利だと思った。 デメリット：今は、こちらが日誌を映し、相手はそれを見ることはできるが、直接書き込んで指導はできない。モニターで同じ日誌を見て、相手も直接日誌に赤ペン指導ができるとよりよい。
⑤	巡回の代用は可能だと思うが、あくまでも補足的なもの。1回は確実に巡回をし、次回の日程調整しても難しい場合等は代用しても良いのではないかな。学生にもよると思う。今回の学生は大丈夫だったが、実習生、指導者、教員の対応力、現状把握力が求められると思う。電話だと1対1だが、複数対複数、複数対1で広く意思決定をとるとき、顔が見えるのでよい。少し手のかかる学生が実習生としてきた場合、日誌がこれしか書けない等、日誌を見せながら先生とタイムリーに実習指導できるのは良いと思う。学生の安心感にもつながるのではないかな。	巡回の代用は可能だと思われる。 実習指導者として、教員に安心して実習生を預けてもらいたいと思っている。メールや電話でのやり取りで今は特に問題はないが、今後コミュニケーション機器を使っていくとしたら、KJ法などグループで作業やディスカッションしているのを大学（遠隔）で見てもらい、指導内容を一緒に吟味してもらえるとありがたい。場合によっては、教員と指導者との教える内容が異なることもあるだろうし、最新の情報、現場での情報の共有ができると思う。

表3. 実習生へのインタビュー結果

	実習生Aさん(地域包括支援センター)	実習生Bさん(就労継続支援B型)
①	-	-
②	実習担当ではない先生が来ると何を話したらよいかわからない。アドバイスはもらえると思うが、実習担当の先生とは違った視点だろうし、混乱したり不安になったりする。高齢者や相談援助に関することがわかっている先生でないと不安がある。そのため質問等も躊躇してしまうかもしれない。せっかくの巡回が基本的なことや表面的なことで終わってしまうし、学生の性格等も考慮して指導を受けられないのは困る。巡回日の前日の心持も異なってくる。実習担当教員であれば、質問や話の展開の想像ができるが、初対面や全く接点のない先生だと何を聞かれ、指導者さんと何を話すのか気になってしまう。実習担当教員だと専門分野からの確なアドバイスがもらえるし、実習内容について突っ込んだ意見交換や指導が受けられる。	実習担当ではない先生が来ると緊張する。授業を受けたことがある先生の場合(特に少人数教育の演習など担当してもらったことがある教員)は馴染みがあるので大丈夫な場合もあるが、やはり実習に関しては事前学習の内容等を知っている先生の方がよい。以前、介護福祉士の実習で本学の教員ではなく巡回のみ担当する非常勤の先生が巡回に来た時、実習担当の先生と言っていることが異なり、困った経験がある。 実習初期であれば、どの先生が来てもそれほど問題はないかもしれないが、実習半ばになると、専門的なことを質問したくなったり、わからないことも出てきたりするので、担当の先生の巡回が望ましい。
③	実習開始から一度も会っていなかったで電話ではなく顔を見ながら指導を受けられて安心できた。コミュニケーション機器は、目線がずれることは気になったが雰囲気では判断した。先生が日誌を読むのが大変だったのではないかなと思う。接続に時間がかかっており大変だと思った。ただし、顔を見ることができて話せることはうれしい。実習担当の先生なので気が引き締まった。	実習開始から初めて担当教員と話せてよかった。実習前の授業内容や事前課題、計画書を一緒に作成してきたという気持ちがあるので、安心感がある。同じ言葉やアドバイスでも担当教員の言葉には安心感と重みがある。担当教員の言葉が支援のよいきっかけになることもあると思う。

④	<p>メリット：話したい人と話せること、顔が見られること。 デメリット：言葉が多少遅れるので相手と声が被る。 相手の周囲の環境や雰囲気を感じ取れないので、どこまで話してよいかわからない。表情は見えるが雰囲気を读むのが難しい。目線が合わないのが気になるので人によっては集中できないかもしれない。</p>	<p>メリット：代理の先生よりは、担当の先生と話せるのでよい。 デメリット：声の大きさがよくわからない。相手の背景や音が気になる。</p>
⑤	<p>1回は巡回に来てもらい、あとは顔の見える機器であれば構わないと思う。福祉業界は人材育成に力を入れているので、マンパワー的にもこういった機器を活用せざるを得ない状況になるのではないかとと思う。</p>	<p>日誌を見てもらえるので良いと思う。帰校日は、教員1名に20名近く学生がいるのでピンポイントでの指導は望めない。その点、コミュニケーション機器であれば日誌も見てもらえるし、顔が見えるので1回巡回の後には、こういった機器でも良いのではないかとと思う。</p>

Ⅵ. 考察

1. 機器の使用状況について

今回は試行的にコミュニケーション機器を活用し、実習期間半ばで実習担当教員による遠隔地からの実習指導を行った。

施設の実習指導者からのインタビュー調査結果において、機器の設置や簡便性については、地域包括支援センター、障害者支援施設のいずれの指導者からも簡便であるとの回答があった。特に説明書を読んでもらうことなく、簡単な口頭の説明ですぐに使ってもらうことができたのでそのような回答になったと考えられる。今回の対象者はいずれも30代の男女であったが、年代や男女も問わず使いやすい機器であると思われた。ただし、LANの環境チェックや設営は、事前に研究協力者であるリコーが行っていたので、実際には、施設の指導者がその部分も行うことを考えると、やや難しいとの回答になることもあったと考えられた。

使用後の感想について、地域包括支援センターの実習指導者は、目線を合わせることの難しさやあいづちのタイミングの難しさ、声のタイムラグ、直接会って話すよりも後に残るものが薄いなどのマイナス意見でのコメントもあった。障害者支援施設の実習指導者からは、視線に若干の違和感があったが表情を見て気持ちがわかったとのことで特に違和感はないようだった。この使用感について、筆者自身はもともと障害者の支援をしており、障害者支援施設の実習指導者と全く同じ感想だった。共同研究者である松本は、もとの現場が病院であり、相談場面の面接重視であることが共通している地域包括支援センターの実習指導者に近い感想であった。

使用感の違いは、単に個人的なものと捉えることもできるが、日々の職務内容とも大きく関わっているように感じた。つまり、地域包括支援センターでは、会話ができる利用者との相談室等での面接のやり取りが中心であるため、目線や間合いなどを常に重視しながら行っており、このような機器を使用したときにも、目線が合わないことへの違和感が大きいのではないかと考えた。障害者支援施設の場合は、日々の中で、目線を合わせて話ができる利用者も少なく、言葉を聞き取っていくということよりも、表情などから判断して支援している場合が多いと思われる。よって、障害者施設の

実習指導者は、目線が合わないことはそれほど気になることではなく、表情さえ見ることができればそこから判断して支援するという習慣が身についているので、さほど気にならなかったのではないかと考えた。

巡回への代用について、いずれの実習指導者からも代用は可能であるとの回答だった。使用感に若干の違和感はあるものの、モニターを通して顔が見えるため、会って話している感覚に近く、また実習日誌を読み添削することも可能だったためであると考ええる。

学生からの使用後の感想や巡回への代用については、目線があわないこと、声のタイムラグや声の大きさ、相手の周囲の環境などが気になるという回答があった。また、実習担当ではない教員による巡回で、なおかつその教員との関係性が希薄である場合は、緊張や不安が大きいということが明らかになった。専門分野や相談援助について熟知している教員でないと質問をすることすら躊躇してしまうとのコメントもあり、それは学生にとっては大きな不利益になってしまうと考えられる。また、実習担当教員ではない教員に指導してもらうよりは、直接会って話せなくてもコミュニケーション機器を使って会話ができれば、顔を見ることができるので安心できたとの回答もあった。日誌添削も可能であり、帰校日指導では1対1の指導が望めないのも、こうした機器の利用は良いといった声もあった。

つまり、総合的に考えると視線の合わなさや声のタイムラグは気になるものの、それよりも実習担当教員と直接話ができる機会を望んでおり、それはコミュニケーション機器の代用でも可能だということがわかった。

よって、実習指導者も学生も実習担当教員も、このような機器の活用をしながら実習指導を行うことも可能であるという見解であったと考える。

当然のことながら、実習施設への巡回は必ず1度は実施すべきである。それは、実習先の利用者像、実習環境などを教員として直接見て肌で感じる必要があるとあり、それがあってこそ適切な指導もできると考える。しかし、本学のように実習学生の人数が多いため、実習担当教員が担当学生の巡回指導に行くことが難しい場合は、コミュニケーション機器を活用し、実習担当教員が指導を行うことで、学生にとって実習中の指導がより有効なものになると考えられた。

2. コミュニケーション機器使用上の課題

今回の実験を通じて、コミュニケーション機器活用の有効性を確認できたと同時に、いくつかの課題も浮かび上がってきた。

まずは、場所の確保の問題である。コミュニケーション機器を活用するにあたり、個室もしくは静かに話せるスペースで、なおかつ電波状況の良い場所が必要になる。この2つの条件を兼ね備えたスペースを施設側で提供してもらうことはやや困難であると考えられる。電波が入りにくい場所にある施設(山の近くなど)も多くあり、モバイルWi-Fiルーターを使った無線LANでは厳しい場合もある。その際は、有線LANを使用することになるわけだが、今回ご協力いただいた地域

包括支援センターでは、個人情報保護の観点から誓約書を法人へ提出し、有線LANを使わせて頂くこととなった。このように電波が入らない施設では有線LANを使わせてもらえるかどうかは課題である。

また、画面を映し出すモニターの準備も課題であるといえる。施設ではノート型パソコンを利用している場合が多く、今回ご協力いただいた障害者支援施設でもノート型パソコンしかなかったため、リコーが準備したモニターを利用することとなった。テレビでも代用可能であるが、今回の施設では、テレビは利用者専用の大型のものであったため、画面を映し出すモニターを準備する必要がある。

そして、費用面についても大きな課題である。こういった機器は施設側、大学側双方が持たなければならない。しかし、基本的に実習期間のみの活用であるため、使用期間が少ないにもかかわらず高コストであることは課題といえる。また、もし実際に活用するとなると数多くの施設に設置しなければならないことになり、さらに費用面での問題が生じてしまうため、機器は一時的にレンタルをして利用するなど活用方法を考える必要もある。もちろん、巡回教員の交通費、日当、時間的制約など総合的に勘案したコストと機器使用時のコストとの比較検討も必要であろう。

今回の実験実施中には、まだIT機器を活用した論文には出会わなかったのだが、その後、磯川ら¹¹⁾が、社会福祉実習教育へのテレビ会議システム導入を試みている。巡回回数が増大が、実習指導者および実習担当教員への大きな負担となっている現状を踏まえ、両者の負担軽減を図りつつ、スーパービジョンの機会を増大するシステムを考案するために行われたものであった。つまり、この問題は、他の養成校でも抱えている課題となりつつあり、今回は、2事例での試みであったが、新たな巡回指導の在り方を模索することに意義があったと考えられる。

VII. 結語

実習生にとって巡回指導は、実習期間中に実習への取り組みを確認することができるため極めて重要な時間である。また現場と大学とが情報や経験を交換し合う場面でもある。本来ならば実習前・中・後の一貫した指導を実習担当教員が行うことが望ましいが、それが叶わぬ場合の方法論として将来的にIT機器の活用も視野に入れてはどうかと考え、実験的に本研究を試みた。

さまざまな課題はあるが、実習担当教員が巡回へ行けなくともIT機器を活用することで一貫した指導を顔が見える状況で行え、実習生の安心、そして実習指導者との連携が行えると考えられた。しかし、そのことが実習全体を通じての効果としてどうだったのかというところまでは検証できていない。また、今回はそれぞれ2名ずつの見解であるため、今後は対象者を拡大して更なる検証が求められると考えられる。

さらに、場所や電波など機器の課題も浮上してきたため、その点についても他のIT機器を活用しての実験が必要ではないかと考えられた。

〈謝 辞〉

コミュニケーション機器を活用した研究は、株式会社リコー グループ技術開発本部の協力を得て行った。川口敦生様(グループ技術開発本部 オフィスソリューション技術開発センター 第二開発室 室長)、本間咲子様(グループ技術開発本部 オフィスソリューション技術開発センター 第二開発室 OS開発二グループ)、宮澤利夫様(グループ技術開発本部 グループ技術企画室 技術戦略室)他、ご協力いただいたスタッフの方々に厚く感謝申し上げます。(所属・役職等は2012年8月現在)

また、実験的試みであるにもかかわらず、快く協力をして下さった地域包括支援センター、障害者支援施設の実習指導者の方々、および2名の学生には深く感謝したい。

〈注〉

- 1) 厚生労働省：社会福祉士養成課程における教育内容の見直しについて、Ⅳ-⑤その他の基準の見直し、2008、p.96.
- 2) 松本葉子,中野陽子,中川正俊：相談援助実習指導における巡回指導について～実習施設へのアンケート調査より～、田園調布学園大学紀要、7：pp57-71、2012.
- 3) 国立情報学研究所 学術情報ナビゲータCiniiのホームページ、<http://cinii.ac.jp/>、2012/3/25
- 4) 福富昌城,坂下晃祥：相談援助実習における巡回指導の役割と課題～週1回体制の巡回指導の事例研究～、花園大学社会福祉学部研究紀要、18：pp.17-30、2010.
- 5) 小川智子,矢野明宏：社会福祉援助技術現場実習におけるスーパービジョンに関する研究～実習巡回教員の役割を通して～、城西国際大学紀要、15(3):pp.83-96、2007.
- 6) 山田真由美他：巡回指導における実習指導者と実習担当教員との協働のあり方に関する基礎的研究～社会福祉援助技術現場実習指導における実習指導者・実習担当教員・実習生のプロセスレコードの分析を基に～、純心現代福祉研究、15：pp.69-87、2011.
- 7) 井上浩：実習教育の枠組みに関する一考察、関西福祉大学研究紀要、9：pp.79-87、2006.
- 8) 栗谷とし子,齊藤茂子,江角弘道：地域看護実習におけるテレビ電話を用いた遠隔カンファレンスの評価、島根県立看護短期大学紀要、5：pp.27-35、2000.
- 9) 厚生労働省社会・援護局福祉基盤課、社会福祉士養成課程及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しに関するQ&A、平成20年7月、問21、p13.
- 10) リコーTV電話、Web会議システム、RICOH Unified Communication System P3000 <http://www.ricoh.co.jp/ucs/P3000/>、2012/3/25
- 11) 磯川舞子,伊藤春樹：社会福祉実習教育へのテレビ会議システム導入の試み、愛知淑徳大学論集.福祉貢献学部篇、2：pp.27-34、2012.

〈参考文献〉

- 荒木重嗣：学生の一步後ろからリードする実習巡回指導～ソリューション・フォーカスト・アプローチ活用の試み～，新潟青陵大学短期大学部研究報告，37：pp.1-11，2007.
- 伊藤春樹他：新しい社会福祉施設現場実習の方法について，藤女子大学紀要第II部，39：pp.13-25，2002.
- 日下菜穂子,柿木志津江：社会福祉援助技術現場実習における配属実習中の指導法に関する研究，関西福祉科学大学紀要，6：pp.111-119，2003.
- 佐藤直子：実習での学生の思いに着目した巡回指導のあり方-M-GTAの試み，静岡福祉大学紀要，4：pp.77-86，2008.
- 高橋昌子：新カリキュラムでの相談援助実習への取り組み～帰校日指導の効果を通して～，教育研究センター紀要，7：pp.41-48，2011.
- 日本社会福祉士養成校協会編：相談援助実習・現場実習教員テキスト，中央法規，2009.
- 深谷美枝：実習プログラムに関する一私論，明治学院大学社会学・社会福祉学研究，133：pp.133-158，2010.
- 古川隆司：巡回指導を通じた効果的な現場指導者との連携～第15回東海・北陸ブロック社会福祉実習研究大会より(含討論)，皇學館大学社会福祉論集，8：pp.145-149，2005.
- 松井奈美,高橋流里子,黒川京子：社会福祉実習教育における実習指導の現状と課題，日本社会事業大学研究紀要，57：pp.137-156，2011.
- 松崎恵美,曾我本政史,黒岩晴子：関係作りのターニングポイント～社会福祉実習・巡回指導時カンファレンスを手がかりに～，福祉教育開発センター紀要，1：pp.65-79，2004.